

因島。しまなみ海道の通る島。広島側から渡って二つ目の島。旅行で来ている。二度目の訪問だった。宿は同じだが、今回は車で来ている。以前来たのは七年前の大学生の頃のこと、今回は車で来ている。自転車で四国まで渡った前回は思うと、やはりずいぶんげんきだったのだなあ、と思わざるを得ない。いや、まだ二十七歳なので体力はあまり変わり映えないと思うし、なんなら筋肉は以前にも増してというところだが、ここで言うのはそういういったものではなく、精神的なところだ。活力、と言うのが正しいだろう。

「まあでも仕方がないよな……」

宿のすぐ前に海が広がる。海沿いを少し歩いてすぐのところに棧橋を見つめる。いろいろ考えて、ついぼやいたのはその途中だった。変わらない海の様子を見て、つい弱気になった。

前回の反省を活かして持って来たキャンプチェアを棧橋に開き、座る。朝陽を見ながら読書する、というのも今回の旅行の目的のひとつだった。達成したが、考えていたほどの達成感はなかった。それもそうか。間を置かず納得する。

牧野富太郎著作の『植物一日一題』を読みながら、数える。

ひとつ、ふたつ、みつつ。

この五年間でいくつかの大事なものを失った。兄。実家。好きだった異性の友人。

兄。兄弟以外の関係性であれば嫌っていただろう相手。尊敬していたし、機会さえあれば呑みに誘っていた。そこらへんの兄弟よりもよっぽど仲良かった。死んだのは一年間同棲した彼女さんと婚約した矢先だった。幸せを心から願っていたから、つらかった。

実家。兄が死んだあと、すぐに父母は埼玉の家を売り払って広島に移り住んだ。「そうなるかも」という段階の話は前々から聞いていた。ただしそのときに聞いていたのは父が本社に戻れないことが決定付けられれば、という条件付きの話で、それが分かるのはあと二年くらい先だとも聞いていた。きっと、心が折れたのかもしれない。父だって子どもだった時代があったのだと思えばその判断をどう言う気はまったく起きなかった。

好きだった異性の友人。今も付き合いがあれば八年もの付き合いになる相手だった。性格にも顔にも惚れていた。そのことを自覚したのは社会人になってからだった。俺は東京、彼女は仙台に住んでいた。俺にとって距離は問題にならなかった。しかし、一週間も返事がなければ不安になってしまうのが俺の悪いところだった。彼女にはストーリーカー被害に遭った過去があった。知らなかった、というのは言い訳にしかならないだろう。仙台駅で俺を見つけた時の彼女の表情は今でもたまに夢に見る。距離を置こう、と言われてからこれまで連絡をとっておらず、そもそもその件から半年後には彼女のラインは消えていた。今はもう音信不通となっている。

本を閉じ、前を見る。朝陽は眩しく、水面に朝陽が反射する様は美しい。しかし気分が重くなる。陽光に目を細め、近くなつては遠くなる海鳥の鳴き声に耳を澄ませる。

そこに雑音加わった。震えるスマホの画面を確認する。〇九〇から始まる知らない電話番号からの電話だった。あまり迷わず、出た。